ずいそう

「旅行好きの野心」

渥 美 正 博

学生時代，誰もがそうであるように旅行が好きで，最も行きたいと思っていたのは奈良・京都だった。中学・高校の修学旅行で参拝した，或いは参拝できなかった神社仏閣に惹かれていたのだが，大学２年の夏休みは北海道を周遊し，またその春休みは与論島（当時，沖縄返還前で日本最南端）へ行ってきた。これは「いつかは日本中を廻ってやろう」という旅行好きの野心の手順であった。その野心の手順とは『卒業後，会社へ勤めるようになったら出張も多いだろう。日本の中心部であればその機会も多く，合間を利用すれば奈良・京都へは何度も行けるだろう。だから長期間の休みが取れる学生時代は辺鄙な地方，遠いところへ行こう』という，たわいもない考えの手順であった。

３年生の夏休みは現場実習があり行けなかったが，ある程度の小遣いが残った。そして４年生の夏は辺鄙な地の（神社）仏閣である四国八十八箇所巡りを計画していた。会社へ勤めてからでは行けないだろう，という判断であった。ところが，４年生の春に会社の就職が内定した後，リクルートから海外旅行の案内があり，気持ちはそれに傾き，四国への計画は途切れてしまった。

会社にも慣れ社会人になって４年目の春，突然，設計用員として有期（半年）で本社からあの四国への転勤を命ぜられた。それまでにも何回かの転勤を経験し，まして独身の身であった。何も厭うことはなかったが，私に辞令を渡す上司がいかにもすまなそうに「半年で必ず帰してやるから，渥美君頼むよ」と言われたことが懐かしい。自分もそれをきいて，「今度は６ヶ月か」とさらっと思いながら東京を後にした。

当時（昭和 51 年）新幹線は既に博多まで延伸されていたが，瀬戸大橋は未着工だった。岡山で宇野線に乗り換え，宇野からは宇高連絡船に乗り換えるのだが，宇野での乗り換えはかなり歩いたような気がする。引込み線から何台もの貨車がガチャガチャと音を立てながら連絡船の腹へ呑み込まれていくのが乗船用デッキから見えた。子供の頃にきいた紫雲丸事故を思い出しながら乗船したが，船内で食べた讃岐うどんのうまさがいささかの不安も消してしまった。

予定通りに業務が済んだ半年後，「渥美君，支店へ残ってはどうか」と支店の上司から思いがけない勧めがあった。本社から地方へ転勤した人には大きく分けて二つのタイプがあり，その地が気に入ってそこに残ってしまうタイプと少しでも早く本社に帰りたいタイプがあるが私は前者のタイプで，殆ど二つ返事で了解してしまった。ただその後，本社への出張で以前の上司に会うのはつらかった。

あれから 30 年余り，本州と四国を結ぶ橋は瀬戸大橋を含めた３ルートが完成してからだいぶたつ。無論，宇高連絡船はない。また，数年前には「讃岐うどん」の大ブレイクもあった。

「住めば都」とはよくいうもので，今ではすっかり地の人間になってしまった自分もそこにいた。数年前に立ち上げた「屋島をよくする会」なるボランティアグループの一員として，国道の清掃活動，国有林の下草刈り，自治体の催し物の運営の支援等に休日を費やしている自分である。無論，四国八十八箇所巡りは済んだが，「日本中を廻ってやろう」という野心は殆どなくなっていた。

――あつみ　まさひろ　清水建設㈱　四国支店　土木部主査――

国道 11 号をボランティア清掃する「屋島をよくする会」（右端が筆者）